

Title	「現実・期待」水準差の発達的变化：青年期心理の一特徴の量的把握の試み
Sub Title	The developmental changes of the differences between reality- and expectation-levels : an approach to the quantitative expression of some aspects of adolescent mind
Author	斎藤, 幸一郎(Saito, Koichiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.403- 420
JaLC DOI	
Abstract	The questionnaire used in this study contained 25 items selected from the "Awaji-Okabe's Extrovert-Introvert Personality Test", to each one of which was attached a scale (horizontal line) with seven equal interval points. On the left end of the scale was shown a negative extreme choice in a brief sentence, and on the right end a positive extreme one. The subjects were at first asked to mark on any one of the given points or on the middle of two points as to the consequence of introspection of their own present personality traits (reality level). They were then asked to mark on the same scales in the same manner as to the judgment of their future possible aspiration levels of their own personality traits (expectation level). The subjects in this study consisted of the first year students of college (61), the second year pupils of senior-high-school (50), the third year pupils of junior-high-school (55), and the first year pupils of junior-high-school (48). The mean value of the interval (absolute value) between reality- and expectation-levels was calculated with each group of subjects. It was founded that the value was significantly larger in the second year pupils of senior-high-school than in the first year students of college or in the third year pupils of junior-high-school, and that the value of the first year pupils of junior-high-school was smallest. It may be concluded that the differences between reality- and expectation-levels are taken as a kind of index to show some specific aspects of adolescent mind.
Notes	III 教育,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0408

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「現実・期待」水準差の発達的变化

——青年期心理の一特徴の量的把握の試み——

齋藤 幸一郎

一 問 題

従来、青年期の精神生活の特質を明らかにしようとする研究は数多く行われており、それらの中のいくつかは、必ずしも相互の間で完全に一致した見解に到達しているとはいえないまでも、大凡において大差のない理論的体系を示しているように思われる。

いま、それらの中の二三の代表的な見解をあげてみると、たとえばまず、Billier, Ch. (1)は、青年期の特徴としてこれを主観的生活から客観的生活へと変化してゆく時期であるとし、その意味で青年期を否定期と肯定期の二期にわかれている。すなわち、彼女によれば、青年はまずこれまで認めてきたあらゆる権威を否定し心理的に独立してゆこうとするいわゆる心理的離乳の時期を経過し、しばらくは主観的かつ否定的な生活態度を維持し、や

がて、大凡一七歳前後を境としてその後は次第に肯定的傾向を強め再び客観的生活へともどっていつて安定することになる。これに対し、Tumlirz, O. (2)は、青年期を第一、第二、第三の三期にわけているが、主観と客観との相克という角度から体系づけている点で Bühler と軌を一にしている。すなわち、その第一期は反抗期と名づけられ、その時期は彼によれば、自己の衝動を抑制する術をもたずいわば主観も客観もともに否定する時期であり、第二期は、彼の言葉づかいによる成熟期であつて、客観は相変らず否定しつつけながらもそこに強い自我があらわれその意味で主観の肯定の見られる時期であり、また、第三期は主観の肯定とともに次第に客観をも肯定し、したがつて主観、客観の調和が見られやがて安定した成人の生活態度へと移行する時期であるとみている。ここで、Tumlirz は、第二期を大凡一四歳から一七歳までとしているところから、一七歳前後を境として否定的傾向を脱却するとする前述の Bühler の見解とある程度一致した見解に到達しているといえる。さらにまた、Kron, O. (3)も青年期を三期にわけているが、この中、第二期を最も純粹に青年期的な時期であるとし、第一期は、児童期からこの第二期への移行の時期、第三期は、第二期から成人期への移行の時期と考え、いわば第二期に一つの peak を設定し、第一期と第三期はどちらかといえはその前後に必然的に介在する移行期のように見ている。そして、この第二期の特質として彼は、最も自我意識の昂揚された時代、内面的、精神的生活にこもる時代、したがつて「求道者としてどこまでも理想を追うとともに、ときに耽溺・懐疑に陥ることもある(5)」時期であるとしている。

我国の研究者の見解も、多くは上述の諸見解と根本的には大差はなく、例えば牛島義友(6)は、Tumlirz の三分法にしたがつて三期にわけているが、「客観的な少年期と連関を保ち、あるいはその否定に集中している時期」

を前期とし、「主観的な精神生活に没頭している時期」を中期とし、「再び客観的な社会生活に移行せんとする過渡期」を後期としている。青木誠四郎(7)においては、一七歳を境として前期、後期にわけ、前期については、心の烈しい動揺のみられる時期としている点で Benier の考え方に類似している。依田新(5)、桂広介(8)も三分法にしたがい、しかも第二期すなわち中期にある意味での重点を置いている点で、やはり Tumiluz や Kroh と大差はない。西谷謙堂(9)も同じく三分法をとっているが、三つの時期を過渡期(前青年期)、青年前期、青年後期としている点で前述の諸見解とは稍異った独自の着眼を包蔵している点もうかがい得るが、彼のいう青年前期(一四歳頃から一八歳頃まで)の終りを大凡一八歳前後に置いておるところから見ると、青年後期はやはり、別な意味での過渡期、すなわち成人期への移行の時期に他ならないものとみて差支えないと思われる。

以上、諸研究者の見解を概括してみると、青年期の区分の仕方若干の差異はあっても、要するに、それらは、児童期から青年期への、そしてまた青年期から成人期への移行期の取扱い方の差異に帰することができよう。そして、結局のところ、ときに Strum und Drang の時期とよばれ、「正常の異常」の時期とよばれ、あるいはまた、不安と動揺の時期とよばれている最も青年期的特徴の甚だしい時期は、大凡一五、六歳、あるいは幾らか範囲をひろげるならば一四歳頃から一八歳頃までと考えるのが適当であろう。そしてまた、これまで考察してきた諸研究者の見解を、互に最も矛盾のないように総合して見るならば、いわゆる主観と客観との間の gap の最も甚だしい時期は大凡一六歳前後とみるのが最も妥当であろうし、しかも、その傾向の強さは一六歳前後を peak として、年令的にその前後に遠ざかるに従って次第に減少してゆき、少くとも理論的には、児童期のある時期および成人期のある時期に至ってその gap の幅は最小となるものと考えるのが妥当であろうと思われる。

しかしながらここで、前述の諸研究者たちの研究法をながめてみると、彼等がとった研究法は、大部分統制された観察法によつたのでもなければ、実験的観察によつたのでもなく、追想、日記、あるいは多少とも偶然的な観察、等によつて資料をあつめ、それにもとづいて理論をたてたのであった。たとえば、Bühler は彼女の著作をなすに當つて、青年によつて書かれた日記を材料として“Das Seelenleben des Jugendlichen”を書いたのであり、また、Tumlirz は青年の指導者としての自己の体験をもとにして彼の理論を体系化したのである。Spranger、H. にあつても、そこにはまず彼の精神科学的な立場があり、その立場に立つて青年期の様相を把握して理論を立てたのであつて(4)、観察によつて得た資料にもとづいて数量的にこれを整理した結果ではなかつた。

いうまでもなく、青年期の研究の如く、内面的かつ複雑な精神生活についての深い理解に到達することを究極の目的とする分野の研究においては、これまでに数多くなされてくるような単純な質問紙法なり、外面的な行動目録法なり、あるいは一面的な粗雑な評定法なりにたよるのみではただ問題の周辺をさまよつてはいるのみで、見かけ上如何に数量的であつても、必ずしも青年期理解の核心に向つて接近してゆけるものとは思われない。

その意味で前述の研究者たちの研究法の如く、そこではどうしても日記、手紙、作品、伝記、逸話記録等の、どちらかといへば取り扱ひの困難な材料を敢えて慎重に取り上げて処理してゆくという異常な努力に加えて、研究者のすぐれた洞察力と理論的に体系化する能力とが要求される場所である。しかしながら、結果において、彼等の所論が、われわれにとつて如何に強力な説得力のある筆致を以つて表現されてあるとしても、そこに、研究者個人の恣意的な解釈がいささかも介入していなかつたという保証をあたえることは必ずしも可能ではない。すでに考察した通り、各研究者の見解相互の間には、ある程度の共通点もあるが、同時にそこには必ずしもすぐ

には黒白を決し得ない相違点も現に介在しているのである。また、以上の点を別としても、彼等の述べている青年期の考察では、いずれも質的な記述をなすに急であつて、必ずしもそれらの記述内容を、資料にもとずいて量的にとらえることによつてさらに精密化し明確化するといふ試みがなされているとはいひ得ない。

以上のような理由から、青年心理学の分野には、従来の、多少とも思弁的かつ定性分析的な研究の結果を、改めて然るべき実験的方法に訴えて再検討し、定量的な考察にまで発展せしめる必要のある問題が数多く残されているように思われる。本研究は、そうした方向への approach の一つの試みとして行われたものである。

すでに述べた通り、青年期心理の特徴の一つとして、精神生活における主観と客観との間の *gap* が極めて大きく、そして、その *gap* の最も大となるのはおそらく大凡一六歳頃であり、その年令を *peak* としてその前後は次第にその *gap* は小となっているであろう、というのが、従来の代表的な諸見解を総合してみても推定されるところである。本研究は、このような仮説を一つの統制された測定条件の下で検証する目的で行われた。

二 方 法

上に述べた仮説からすれば、もし、

「いくつかの年令段階の被験者群に対し、いくつかの性格特性に関して現実の自己を自己評価せしめると同時に、同じ特性のそれぞれに関して将来の自己をどの程度にまで変化させ得ると考えるかを判断せしめ、前者によつて示された判断値すなわち『現実水準』と、後者によつて示された判断値すなわち『期待水準』との間の『水準差』

を測定する」

ならば、青年期の真只中にいる被験者群の方が、年令的にそれと前後するそれ以外の年令段階の被験者群に比較して、この「水準差」の値は最大となる、という結果が導き出される筈である。この点を検討する目的で、本研究では、上述の線に沿って、以下に述べるような方法がとられた。

まず、淡路岡部式向性検査その他の質問紙法による性格検査用紙の質問項目の中から、適当なものを二五問だけ選び、それらの各質問に対する回答を七段階からなる価値段階法によって報告せしめうるような質問紙を作成し、これを必要枚数だけ印刷した。但し七段階の尺度上の各段階にわたって評価規準を設定することはあまりに煩雑でもあり、またかえって被験者たちの自由な判断を妨げる恐れがあると思われたので、尺度の最左端および最右端にのみその評価規準の内容を端的に示すような言葉を掲げ、両者の中間はただめもりのみを示すにとどめた。このようにして作られた質問紙の各質問項目および設定された尺度を示せば左の通りである。

- 1 ものごとを氣にかけるかどうか
小さなことでも、とても氣にかける—————大きなことでも、決して氣にかけない
- 2 決心がつきやすいかどうか
なかなか決心がつかない—————どんなことでも、かんたんに決心してしまう
- 3 ものごとを実行するのに暇がつかるかどうにか
大事をとりすぎて、なかなか実行できない—————せっかしく、すぐに実行してしまう

- 4 決心をあとから変えることができるかどうか
 1度決心したらぜったいに變えることができない
 決心したことでも、いくらでも變えてしまおう
- 5 思案する方が、それとも活動する方が
 いつも思案ばかりしていて活動しない
 何の思案もなく、活動ばかりしている
- 6 陰気か陽気か
 とても陰気すぎる
 とても陽気すぎる
- 7 失敗に対してはどうか
 小さな失敗でも、とてもがっかりしてしまう
 大きな失敗でも全く平気である
- 8 呑気かどうか
 とても心配性で、とても呑気でいられない
 いつも、呑気すぎる位である
- 9 無口かどうか
 いつも無口すぎる
 いつもおしゃべりすぎる
- 10 気が長い方かどうか
 とても気みじかかせつかちである
 とても気ががで、のろみである
- 11 持物やお金をたいせつにするかどうか
 たいせつにしすぎて、けんぼうな位
 とてもなげやりで、むだが多い
- 12 不平や不満が多いかどうか
 いつも不平や不満で、あたまの中がいっぱい
 全く不平も不満もなく、いつも満足している

- 13 自分の評判が気にかかるかどうか
 いつも評判だけが気になって仕方がない
 評判などどんなに悪くても全く問題にしない
- 14 かくしだてをするかどうか (ひみつが守れるかどうか)
 親友に対してさえもかくしだてをする
 全くかくしだてをせずひみつも守れない
- 15 服装など派手好きかどうか
 誰よりも派手でないと気がすまない
 地味すぎる程地味でないと気がすまない
- 16 他人を信用するかどうか
 信用しすぎて、よく他人にだまされる
 うたがい深く、少しも他人を信用しない
- 17 世話ずきかどうか
 とても世話ずきで、だまっていられない
 人の世話など決してする気がしない
- 18 ものごとをするのに計画的けいかくにするかどうか
 いつも全く無計画にやっつけてゆく
 何でも計画をたててやらないと気がすまない
- 19 正直かどうか
 馬鹿正直で、少しもゆうづうがきかない
 いつも平気でうそをついてうまくやっつけてゆく
- 20 同情心があるかどうか
 誰にでも同情してすぐにホロリとしてしまう
 冷血漢といわれる位に全く同情心がない
- 21 うれしき、かなしきがすぐそぶりにあらわれるかどうか
 ちっともあらわれない
 いつも、はっきりとあらわれる

22 よくはしゃぐかどうか

どんなときでも、はしゃぐことはない————はしゃいでばかりいる

23 ものごとをするのにあきらまいかどうか
あきらまなくて、一つのことをすべからず————一つのことについてまでも、こりかたまる

24 用心ぶかいかどうか

用心ぶかすぎて、おびょうな位————用心がなざすぎる

25 雑談などするのが好きかどうか

とても話し好きで、誰とでもすべからず話————人と雑談などするのは大嫌いだである

右の各項目の尺度の両端に掲げられた言葉を見ればわかるように、それらの表現はいずれもできる限り、極端すぎるほどに両極端の意味をもつように設定された。いいかえれば、被験者たちが回答をマークするに際して、いつも右に近い方にマークするほど「よい性格」であることを意味するとか、左に近くマークするほど「よい性格」であることを意味するといった受けとり方をしないように配慮された。

被験者はいずれも慶応義塾内男子学生生徒で、その内訳は、大凡二箇年きどみに、

大 学 一 年 (一八歳以上) 六一名

高等学校 二 年 (一六歳以上) 五〇名

普通部 三 年 (一四歳以上) 五五名

普通部 一 年 (一二歳以上) 四八名

「現実・期待」水準差の発達的变化

で、合計二二四名が用いられた。

測定は上記各群別に教室内で団体式に行われた。実施にあたっては筆者みずから Instruction その他を行い、いずれの群に対しても殆んど同様の方法で行った。

まず、前記のように作成された質問紙を一人に一枚ずつ配布した後、第一、第二の二つの Instruction があたえられた。

第一の Instruction は左の通りである。

「いまからみなさんに一種の性格検査をやってみようと思います。いま配った紙をみるとそこには一番から二五番まで二五の質問が書いてあるでしょう。その一つ一つについて、日頃のあなた方自身がどの程度であるかをよく反省して思った通りを正直に答えて頂きたいのです。答え方は、それぞれの質問ごとに書かれてある『ものさし』の上のどこかに一つだけ丸印をつけるのです。『ものさし』には七つの区切りがしてありますから、丸印をつけるときには、その区切りのメモリのところか、あるいは、メモリとメモリの丁度まん中のところか、どちらかにして下さい。『ものさし』の一番左端と一番右端に書いてある規準を両方ともよく読んでから、日頃の自分が、その両方の間のどの位のところに当るかをよく考えて印をつけるのです。」

以上の第一の Instruction の後、一番から順次、一問一問に対して十分な解答時間をあたえ（各問約一分以内）、そして二、三問ごと、上述の Instruction の一部を繰返してあたえながら、二五番まで終らせた。その

後、ひきつづき次の第二の Instruction をあたえた。

「これで、みなさんに日頃のあなたがた自身について答えてもらいましたが、もう一度一番から順番に、こんどは、将来、あなたがたは自分で努力して、どのような性格の持ち主になりたいと思うか、しかも、努力すればどの程度にまでゆけると思うか、その程度を考えて、さっきと同じように、こんどは丸印でなくバツ印（板書×印）をつけていって頂きたいのです。ただ、これこれの程度の性格の持ち主になりたいというだけではなく、ほんとうにその程度の性質の持ち主になれると思うというその程度を書くようにして下さい。この点で、こんどの答え方は、さっきの答え方よりも、もっとむずかしいでしょうから、さっきよりもさらによく考えてから答えるようにして下さい。」

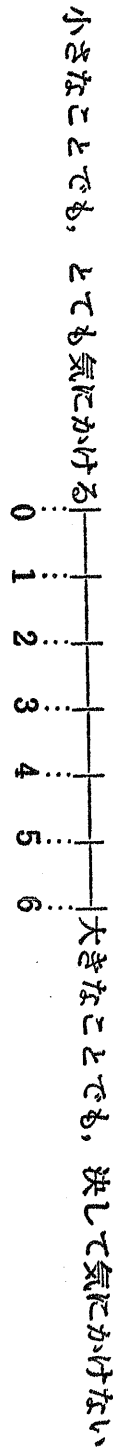
この第二の Instruction 後も、前記第一の Instruction 後と同様に、逐条的に、各質問ごとに十分な回答時間をあたえながら記入せしめた。なお、この場合にも、中間でしばしば、上の Instruction の一部、特に、「理想」の水準を答えるのではなく、実現の可能性のあると思われる水準、すなわち、「期待」水準を判断するように注意をあたえた。

以上の仕事は、いずれの群の被験者についても、十分に厳正な雰囲気の下で行われた。また、質問紙は記名式であったが、回答内容について個人の価値を問題にするのではなく、どこまでも全体としての傾向を知るのが目的である点を強調し、無用な警戒心や虚栄心を抱かせないように努めた。

三 結 果

結果の集計にあたっては、まず各項目ごとの尺度の最左端に〇点をあたえ、それより右方の六つのめもりに対しそれぞれ、一、二、三、四、五、六点をあたえて、被験者が〇印もしくは×印を以て回答した位置を数字に置きかえうるようにした。第一項目についての配点の例をあげれば左の如くである。

1 ものごとを氣にかけるかどうか



したがっていうまでもなく、被験者がめもりとめもりの中間に回答した場合にはそれぞれ、〇・五、一・五、二・五、三・五、四・五、あるいは五・五点をあたえた。

このように配点された場合、被験者の自分自身の現実の位置、すなわち〇印の位置に当る数値を現実水準とし、また、被験者によって将来変化し得ると期待された位置、すなわち×印の位置に当る数値を期待水準とした。

ところで、本研究の目的からして直接に問題とされ比較されなければならない数値は、各群の被験者によって示された現実水準の数値それ自身でもなければ、また期待水準の数値それ自身でもない。なぜならば、それらの数値それ自身は、ただたんに各項目についての両極端の間どの位置に回答したかを示すのみであって、それら

Table 1
項目別，被験者群別，
現実水準および期待水準(平均値)

項目	現 実 水 準				期 待 水 準			
	中学 1年	中学 3年	高校 2年	大学 1年	中学 1年	中学 3年	高校 2年	大学 1年
1	2.563	2.100	1.980	2.139	3.438	3.536	3.210	3.639
2	2.635	2.536	2.650	2.627	3.271	3.873	3.790	3.631
3	3.427	3.345	3.100	2.861	3.104	2.873	3.050	2.943
4	2.896	3.082	3.360	3.148	2.521	2.273	2.370	2.492
5	3.063	2.891	2.820	2.828	3.125	3.200	3.210	3.033
6	3.906	3.791	3.720	3.459	3.969	3.945	4.050	3.689
7	2.469	2.382	2.570	2.615	3.250	3.409	3.390	3.427
8	3.365	3.018	3.140	2.795	3.354	3.482	3.310	3.418
9	3.667	3.300	3.330	3.123	3.365	3.400	3.080	3.262
10	2.448	2.573	2.320	2.492	2.948	3.200	2.980	3.197
11	2.896	3.082	3.670	3.278	2.813	2.964	3.080	2.779
12	3.167	3.027	2.600	2.926	3.833	4.036	3.580	3.787
13	3.198	3.100	3.330	2.730	3.854	3.736	3.930	3.590
14	3.020	3.300	2.930	2.828	3.042	2.927	2.820	2.721
15	3.313	3.418	3.110	3.172	3.313	3.418	3.100	3.197
16	2.719	2.382	2.500	2.475	2.792	2.936	3.100	2.779
17	2.813	2.655	2.850	2.369	2.760	2.655	2.810	2.451
18	3.198	2.627	2.840	3.541	4.021	3.791	4.150	4.279
19	2.719	2.673	2.760	2.648	2.427	2.855	2.870	2.615
20	2.063	2.227	2.190	1.934	2.135	2.445	2.670	2.328
21	3.958	4.018	3.930	3.893	3.396	3.518	3.450	3.221
22	3.563	3.264	3.450	3.451	2.969	2.827	3.000	3.205
23	2.573	2.518	2.300	2.803	3.573	3.782	3.650	3.631
24	2.510	2.809	2.810	2.418	2.750	2.800	2.960	2.664
25	1.948	2.536	2.420	2.361	2.458	2.300	2.550	2.262
平均	2.957	2.906	2.906	2.838	3.139	3.207	3.206	3.130
総平均	2.902				3.171			

の数値が大でありあるいは小であったということが何を意味するかは、項目ごとに検討する限りにおいて意味を見出し得るのみで、全項目を通じての一般的傾向としてはなんらの意味をも認めることができないからである。また、項目ごとに各群の被験者の示した現実水準および期待水準をつぶさに検討することは、本研究の本来の目的ではないから、ここでは省略する。しかし、参考までに、項目別、被験者群別に現実水準および期待水準の数値のみを掲げてみれば Table 1 の如くである。

また、同様の理由から、現実水準と期待水準との間の代数的な差、すなわち前者から後者に向ってどの程度に増大（プラス）傾向があったかそれとも減少（マイナス）傾向があったかを問題にし、同時にそれらプラスマイナスの代数的な和にもとずいて算出された平均値を問題にすることも本研究の本来の目的ではない。

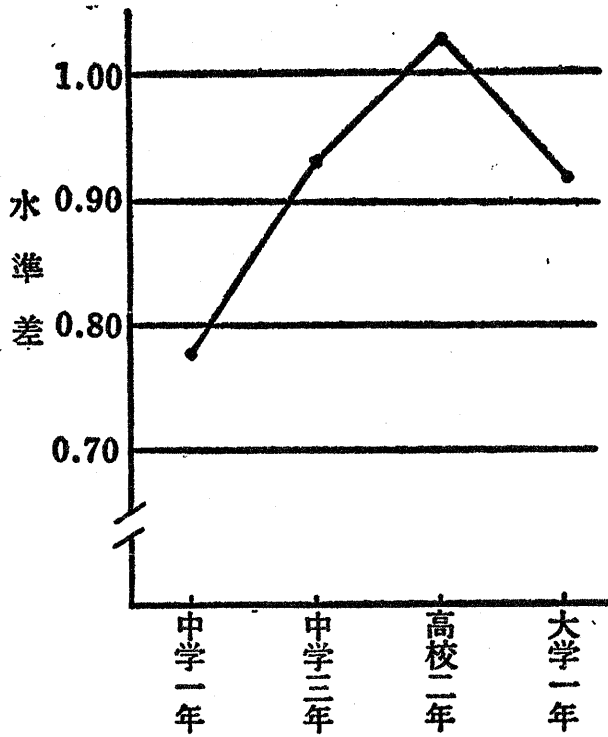
はじめに述べたような目的に沿うような集計は、結局、次のようにしてなされなければならない。すなわち、まず、各個人について、各項目ごとに、彼の示した現実水準と期待水準との間の差の絶対値を算出する。このようにして算出された差の絶対値こそ、まさにはじめに述べた「水準差」の名に値するものであるから、つぎに、各項目について、群ごとの平均水準差を算出する。然る後に、すべての項目にわたって群ごとに、水準差の総平均を算出して比較するのである。左の Table 2 はこのようにして計算された結果を示している。

Table 2
項目別・被験者群別
平均水準差および総平均
(下線は各項目中における最大値を示す)

項目	中学 1年	中学 3年	高校 2年	大学 1年	平均
1	0.990	1.527	1.390	<u>1.631</u>	1.385
2	0.938	<u>1.518</u>	1.260	1.205	1.233
3	0.719	0.982	<u>1.230</u>	1.230	1.043
4	0.729	1.100	<u>1.180</u>	0.984	0.998
5	0.750	0.891	<u>0.940</u>	0.926	0.877
6	0.542	0.709	<u>0.930</u>	0.754	0.734
7	0.958	1.055	1.140	<u>1.189</u>	1.086
8	1.010	1.064	1.080	<u>1.098</u>	1.063
9	0.969	0.882	<u>1.060</u>	0.816	0.943
10	0.854	0.918	<u>1.110</u>	0.902	0.946
11	0.744	0.864	0.900	<u>1.008</u>	0.879
12	0.740	<u>1.055</u>	0.990	0.959	0.936
13	0.833	0.809	0.880	<u>1.041</u>	0.891
14	0.521	0.755	<u>0.870</u>	0.467	0.653
15	0.448	0.400	<u>0.380</u>	<u>0.549</u>	0.444
16	0.615	0.927	<u>0.930</u>	0.893	0.841
17	0.635	0.564	<u>0.800</u>	0.590	0.647
18	0.917	1.291	<u>1.490</u>	0.934	1.158
19	0.542	0.709	0.670	<u>0.918</u>	0.710
20	0.427	<u>0.800</u>	0.720	0.705	0.663
21	0.833	0.845	<u>1.040</u>	0.984	0.926
22	0.948	0.818	<u>0.950</u>	0.885	0.900
23	1.292	1.318	<u>1.610</u>	1.123	1.335
24	0.844	0.827	<u>0.990</u>	0.770	0.858
25	0.740	0.782	<u>1.110</u>	0.770	0.851
平均	0.778	0.936	1.026	0.935	0.919

Fig. 1

平均水準差の被験者群別総平均の
年令的变化



水準五パーセント以上の有意差がみられた。いかえれば、各年令段階の被験者たちがグループとして示した数値を比較する限り、そこには、高校二年を *Point* とし年令的に前後に遠ざかるにしたがって減少する傾向がみられた。Table 2にもとずいてこの傾向を図示すれば Fig. 1の如くである。

つぎに、おのづかの Table 2 において下線を施された数値の箇数を数えあげることによってわ

Table 2 によれば、水準差は、どの項目、どの群についても大凡「一前後であって、それほど大ではない。いかえれば、各項目に対する可能な限りの両極端の回答間の距離の大凡「六分の一」前後の水準差を示したにすぎない。

しかしながら、群別に比較してみると、この水準差の数値にはやや規則的な差が見られ、その結果、群ごとの平均の数値をみると、高校二年の群においてこの数値が最大であり、中学三年および大学一年の群では互に殆んど相等しくともに中位を占め、中学一年の群において最小値を示している。そして、これら群相互間の差について、Table 2 の如き項目別、被験者群別の平均水準差の数値にもとずいて計算された限りでは、t 検定の結果、

中学一年と中学三年、中学一年と大学一年、中学三年と高校二年、高校二年と大学一年、それぞれの間で、有意

かる通り、二五項目中、高校二年において最大値を示した項目は一五項目にわたっていたのに対し、中学一年において最大値を示した項目は一つもなかった。これに対し、同じく Table 2 によってみると、高校二年において最小値を示した項目は、第一五項目一つのみであった。

以上の結果を総合してみると、高校二年という時期は、大学一年、中学三年、あるいは中学一年などの時期と比較すると、「現実・期待」間の水準差が最も甚だしいという意味で、一つの特徴のある時期に相当していると結論することができる。

四 考 察

本研究では、直接的には、二五項目にわたる性格特性に関して、現在の自己に関する自己評価と、未来の自己の可能性についての判断との間の gap の大きさを手掛りとし、結果として、高校二年すなわち青年期の真只中にある年齢段階においてそうした gap の大きさという点で一つの peak に相当していることが明らかにされたわけであるが、間接的には、前述したようなこれまでの青年期研究者たちの多少とも一致した見解に対し一つの数量的な裏付けをあたえたものといえることができる。性格特性の自己評価に関し、現実についての評価と未来についての評価との間の gap が大であるということは、ある意味で一つの葛藤場面に直面しているということが出来るし、また、いいかえれば、ときには現実の自己を否定し卑下し、あるいはまたときには期待が大き過ぎてそのために大きな欲求不満 (Frustration) に直面する、といった危険をはらんでいることを意味している。い

ずれにしても、これらは、従来いわれてきた青年期心理の一つの顕著な特徴を示すものである。

しかしながら、いうまでもなく、本研究では、青年期心理のすべての特質が数量的に裏けづられたのではなく、それらの一面のみが一つの角度から考察されたにすぎない。したがって、今後同じ面をまた異った角度から異った手掛りを通じて数量化し、あるいはまた別な面についても数量的に研究してゆかなければならないところである。

本研究は、青年期の一面の特徴を数量的に把握することを直接の目的としたのであって、その特徴の由来を問題にすることは本来の目的ではなかったけれども、結果として見出された数値の年令差の由来についてはいくらかの考察をつけ加えることができる。すなわち、Figure 1 に示された通り、水準差の総平均の数値は、高校二年を Peak として、大学一年も中学三年も殆んど同程度の下降を示し、中学一年ではさらに下降の傾向を示していたが、これらの下降傾向の意味については、高校二年を境として、大学一年と、中学三年および中学一年との間で異っているものと見なければならぬように感じられる。中学生の方が高校生よりも水準差の数値が小であったのは、前者においては自己の性格特性に関して、いまだ明確な「理想像」といったものが形成されて来ていなかったためであるように思われる。それに対して、大学生の方が高校生よりも水準差に関して下降の傾向を示したのは、大学生においては、性格特性に関して相当に明確な「理想像」を持ち得ると同時に、理想はたんなる理想として止揚し、その理想の方向への自己実現の可能性に関しては、たんなる理想よりも多かれ少なかれ手近なところに引下げて水準を設定する能力をもつに至ってきているためであるように思われる。したがって、以上の推定が正しいとするならば、高校生の場合には、自己の性格特性に関して理想像を描き出す能力は有しながらも、

自己および外界との関連において理想を control して実現可能性のある「期待」にまで引下げる能力を有しないために、水準差が最大となってあらわれたのだと考えてよいように思われる。但し、重要な点は、これらの年令的な差異は、たんなる Instruction のうけとり方の差異によって生じたものではないという点である。Instruction は、いずれの年令段階の被験者に対しても誤解を生じないように十分に明確にあたえられたのであるから、上に考えたような発達の差異がもしあるとすれば、それは、それぞれの発達段階に本質的に内在する差異と考えられなくてはならない。

しかしながら、このたびの研究の限りにおいては、上の考察は、いまだ単なる推定の範囲を出ない。こうした点については、さらにまた、方法を変えて研究すべき問題である。

文献

- 1 Bühler, Ch. *Das Seelenleben des Jugendlichen*. 1922.
- 2 Tumlirz, O. *Die Reifejahre*. 1923.
- 3 Kroh, O. *Die Psychologie des Grundschulkinde*s. 1928.
- 4 Spranger, E. *Psychologie des Jugendalters*. 1925.
- 5 依田新・青年の心理、昭和二五年。
- 6 牛島義友・青年の心理、昭和一五年。
- 7 青木誠四郎・青年心理学、昭和二五年。
- 8 柱広介・青年心理学、昭和二五年。
- 9 西谷謙堂・青年の心理、昭和二九年。